

『知られぬ日本の面影』の「日本の庭」*にみる小泉八雲旧居の要素

*ラフカディオ・ハーン 池田雅之訳 新編日本の面影 角川ソフィア文庫より

■建物・玄関周り

「日本の庭」	対応写真
新居は、家中屋敷、かつて位の高い武士が住んでいた屋敷である。そこは、城の外濠を取り囲んでいる、街路と呼ぶにはほど遠い狭い通りから、瓦を頂く高くて長い塀で仕切られている。 P213	
寺の山門ほどもある出入口まで、幅の広低い石段を上がる。門の右側に突き出ているのが、木牢のように頑丈に棧のはまった見張り窓だ。封建時代には、裏手から武装した家臣たちが、身を隠したまますべての通行人に目を光らせていたのである。棧と棧との間がとてもつまっているのも、その背後に人の顔があっても道路側からは一切見えない。 P213	
門を入ってから母屋に続く道も、両側は塀に囲まれている。だからここを訪れる客はよほどの特権でもないかぎり、目の前にいつも白い障子戸が閉まっている玄関口が見える。 P214	

ほとんどの古い武家屋敷にも表門を入ると、たいていの玄関の近くに、大きな独特の葉をもつ丈の低い木が見受けられる。出雲では、その木を「手柏」と呼び、わが家の玄関の脇にもある。

P223

ヤツデ（手柏）



■庭

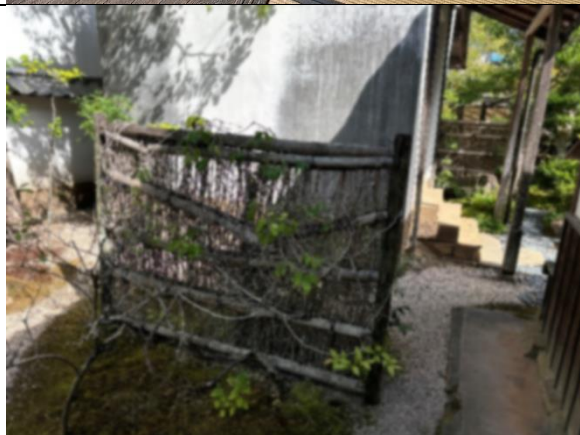
庭はことのほか美しい、屋敷の三方向を囲むひと続きの庭である。広い縁側からは庭が見渡せ、縁側の場所によっては、ふたつの庭を一度に堪能できる。

P214



竹と藺草で編んだ垣根には、真ん中に広い門扉のない開口部があり、それが庭を三分割する境となっている。しかしこれとて、本来の柵というよりは、あくまでお飾りのために作られたにすぎない、庭の様式が、ここから始まり、ここで終わっていると、ただたんにその境界を示しているだけのものである。

P214



昭和 58 年修理工事に際して再建（復元）された袖垣

その庭には、ずいぶん苔蒸した大きな岩があり
①、水を湛えた風変わりな石の水盤②もいくつか据えてある。歳月を経て緑色になった石灯籠③や、城の天守閣に見られるような鯨④もある。



①



②

P222 (①～④の数字は追記)	 ③	 ④
老木の茂っている小山もある。緑の草の長い斜面もあって、花をつけた灌木が影を落としており、川岸の土手のようである。緑におおわれた築山は小島を思わせる。 P222		
踏んではならない砂地ではあるが、まさに小川を渡るための踏み石のように、荒削りの岩の平板がわずかに不規則な間隔で並んでおり、その上を伝ってあちこち行けるようになっている。 P222		
ほとんどの日本の庭にみられるもうひとつの灌木が南天の木である。(略) この優美な木には二種類あってひとつは赤い実をつけ、もうひとつは白い実をつける。後者の方は珍しいが、わが家の庭には両方とも植わっている。よくある赤い実の南天の方は、縁側の近くにある(たぶん夢を見る人には便利なような)。もう一本の木は、庭の真ん中の小さな花壇に、シトロンの小さな木と一緒に植わっている。 P224	白い実をつけるナンテンは対応する場に見当たらず。シトロソ(仏手柑?) もなし)。縁側近く(書斎西側)に赤と白のナンテンがH16にはあったが、現在は消失)  南側玄関への扉付近のナンテン	

桜の木も二本ほどある。(略) わが家の庭にある桜は、シロにぽっと紅をさしたような、とても優美なピンク色の花をつける。(略) 226_5	庭園内には無し
わが家の西のはずれに影を落とし、縁側のひさしの上にまでその黒い滑らかな枝を突き出しているのが、見事な日本の梅の木である。227_9 ウメの古木	
その近くには月桂樹の一種があり、ブロンズのようにつややかな槍形の葉をつけている。この木は日本では「譲葉」と呼ばれ、手柏と同様に武士の旧家ではよく見られる木である。 P225 ユズリハ	
わが家の庭にも五本の松があるが、それらは無理矢理奇異な形にゆがめられたものではない、長年のたゆまない手間暇と賢明な剪定により、実に素晴らしい絵のような枝振りを見せているのである P225	 クロマツ
北側にある第二の庭は、私のお気に入りの庭である。 P232	

大ぶりの草木が茂っているわけではない。そこには青い砂利が敷いてあり、その真ん中に小さな池がある。珍しい植物に縁取られたそのミニチュアの池には、小さな島も浮かんでいる。その島には小山もいくつかあり、小人の国に生っているような桃、松、つつじの木が生えている。その高さは、十センチほどしかないが、なかには樹齢百年を越える古木もある。それでも、この作庭ぶりを庭師の意図した通りに眺めていると、不思議とミニチュアだという印象は受けない。

P232



庭に面した客間の一角から眺めると、角度によっては、石でも投げ込めそうなすぐ近距離に、まるで実際の島を浮かべている、本物の湖畔の風景が広がっているようである。

P232



ようやく島の上に立つ本物の石灯籠を見つけて、実物の湖畔というのは幻想であったことを気づくのである。石灯籠の大きさが、どうしてもその風景にそぐわないのだ。この庭が造られたときに据えられたものではないのだろう。

P233

現在は無い

■生物

池の縁のあちこちに、ほとんど水面と変わらない高さで、大きめの平たい石が置かれている。その上に立ったりしゃがんだりすれば、池に棲む生き物を観察したり、水草の世話をしたりできる。

P233



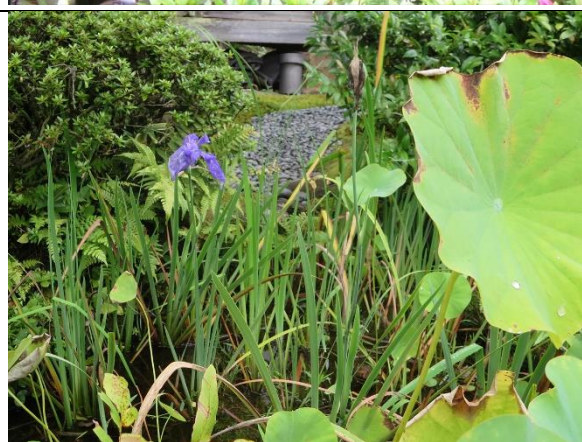
メダカ

美しい睡蓮が、その鮮やかな緑の水盤状の葉を油を浮かべたように水面に浮かべている。たくさん浮かんでいる蓮には二種類あって、ひとつは薄紅色の花を、もうひとつは真っ白の花をそれぞれつけている。水際には菖蒲が目にも鮮やかな紫色の花を咲かせている。ほかにも観賞植物やシダや苔も生えている。

P233



HP 写真より



菖蒲

だがなんといっても、これは蓮池だ。これがこの池の最大の魅力である。初めて葉が開くときから最後の花が落ちるまで、蓮の生長過程はどれをとっても素晴らしい。（略）

P233



HP 写真より

■庭園垣根より北側（第三の庭）

第三の庭はかなり大きく、蓮池の庭の垣根の向こう側から、古い武家屋敷の北と北東の境にまたがる鬱蒼とした小高い丘陵の麓まで広がる一帯である。かつてこの辺りは一面の竹藪になっていたが、今は草と野花が生え放題の荒地地といったところだ。北東の隅には立派な井戸があり、そこから精巧にできた竹筒の樋を通して、氷のように冷たい水が家まで引かれている。

P234



北西のはずれには、丈の高い草に隠れるようにして、たいそう小さなお稲荷さんの石の祠が立っている。その祠の前には、祠の大きさに見合った小さな狐の石像が二体立っている。祠も石像も欠けて崩れており、ところどころ濃緑の苔にびっしりと覆われている。

P234



しかし、屋敷の東側にあるこの広い庭の一角には、狭いながらも耕作地がある。すべて菊作りに当てられており、激しい雨と強い日射しを防ぐ工夫がされている。障子のように白い紙を貼った軽い木枠の屋根を、細い竹の支柱の上に、ひさしのように斜めに差しかけてあるのだ。

P234

無し

■生物

四種類の蛙がいる。うち三種類の蛙は蓮池に棲んでいるが、あとの一種類は木に棲んでいる。木にいる方の蛙は、とても小さく鮮やかな緑色をしている。まるで蟬のようなかん高い鳴き声を出す。外国にも似た種類のものはいるが、そのケロケロという鳴き声が雨の前兆といわれていることから、この蛙は「雨蛙」と呼ばれている。

P237



(以下名称のみ記載)

蓮池に棲む蛙：ばば蛙、縞蛙、殿様蛙

その他庭に棲む蛙：蟾蜍（がま蛙？）

池に棲む生物：小さな魚、イモリ、まいまい虫、カタツムリ、亀

蛇、イタチ

十一種類はくだらない蝶

蟬：夏蟬、ミンミン蟬、蛸、ツクツクボウシ
きりぎりす、天子トンボ、

招かれざる客：二種類の蚊、サネモリ（ウンカ）、
蛾、カマキリ、ゴキカブリ

蛭、灰色のトカゲ、ムカデ、蜘蛛

裏山の森：鶯、ふくろう、山鳩、烏、栗まき鳥、
ホトトギス、

*ラフカディオ・ハーン 池田雅之訳 新編日本の面影 角川ソフィア文庫